

施設で虐待を受けた自閉症の青年の治療

大熊 恵子

Therapy of The Adolescent with Autism Abused in the Residential Institution for Developmental Disorder Persons

Keiko Ohkuma

はじめに

近年、社会で児童虐待の問題がクローズアップされてきている。親からの虐待を受け、保護された養護施設でも、施設長や職員による虐待が繰り返され、子ども達が児童相談所に訴え出た事件も記憶にまだ新しい。それさえも問題として取り上げられるのに長時間を要した。ましてや障害児者の場合は、訴え出る術さえ持ち合わせていない。

ここに知的障害者の入所施設で、職員に暴行を受け荒れ狂った26歳の自閉症の青年A君への半年余りにわたる危機介入とPTSDの治療の経過を報告し、問題の背景について触れておきたい。

1. 事例の概要 (*以下に出てくる人名や学園名は仮名である。また治療者をThと記す。)

クライアント：A君 男子 26歳 自閉症

主訴：衝動的な怒りと破壊的な行動を繰り返す。

家族構成：父親は6年前に死去。同胞は兄1人、姉1人でそれぞれ独立して生活している。現在は母親(61歳)とA君の二人が団地に暮らしている。

A君の障害の程度：A君は4歳の時、自閉症の診断を受けている。幼い頃は多動であったが、小学校の高学年でようやく落ち着く。言語は3語文。オウム返しも多いが、簡単な問いかけには応答はできる。身辺生活は自立できている。新しい環境や、変化に緊張しやすく、また過剰適応してはストレスを溜める傾向が強い。数字へのこだわり、本を番号順に並べなくては気が済まない等の強迫的な傾向がある。かたかなとひらがな、簡単な漢字は書ける。

これまでの生活歴：かつてA君は、4歳から小学校5年まで週1回、当大学相談室に通い、障害児の治療教育グループに所属していた。小学校は4年までは特殊学級に通級していた。3年の時に学校へ過剰適応し、4年生になって不登校になり、1年間はひきこもりの状態が続いた。5年時には養護学校に転校し、養護学校へ適応できた時点で相談を終結している。A君はその後養護学

校の高等部まで進み、日常生活も自立し、生活全般に安定していた。

母親はA君の卒業後の居場所を求めて、地域の作業所作りの運動に積極的に関わり続けてきた。作業所の準備段階の仮住まいで、他の母子達と一緒に、資源回収の空き缶つぶしや、陶芸等のいくつかの作業を試みる日々を過ごした。バザーや街頭募金等で資金を集め、やがて無認可の作業所を設立することができた。しかしそれまでの母親がA君を連れて運動に参加する日々に、A君は、自分の生活のペースを守れない等のストレスを溜めていった。また作業所は、重度の寝たきりの障害者も抱え、職員の手は足りない。次第にA君の状態は不安定になっていった。母親は職員と話し合うが、「作業所は職員の人数も少なく、養護学校と同じようにはできない。」と言われた。わが子のために、障害者のための作業所を親達の手で作るのだと運動に関わり続けて来た母親は、この言葉にA君を施設に入所させようと決心した。更に、その時期に父親の急死が重なり、A君は20歳の時に施設に入所するに至った。

社会福祉法人茨学園はO市の手をつなぐ親の会のバックアップで新設された知的障害者の入所施設である。手をつなぐ親の会の会長が施設長となった。最初の2年間はともかくも、施設長のワンマン経営に、その後は事務長をはじめ、施設職員が次々と変わっていった。A君が好きな先生達も次々と辞めていき、A君はそのことを「後藤先生、引越した。」「野口先生も引越した。」と繰り返していた。その頃よりA君が施設から帰省する度に、その体に傷やアザがあることが多くなった。入所5年半の秋頃よりA君は食事をとらなくなり、短期間に10キロ近く痩せてしまった。またA君の背骨に沿って長く痣がつき消えることがなかった。恐らく暴力をふるわれていた傷跡だと思われる。ある時は母親が帰省の迎えに行ったら、A君の顔が赤く腫れ、靴で踏まれたような跡がついていた。職員からは前日に転んで怪我をしたと説明された。母親はいつA君を退所させようかと迷い続けていた。毎月帰省する度に、母親は「学園、辞めようか。」と言うが、それでもA君が「学園に帰る。」「ごめんなさいして、学園に帰る。」と言うので、施設に送っていった。しかし2月になって、A君の口から「学園卒業」の言葉が出てきた時に、母親は施設の退所を決心し、3月末に6年間の施設での生活を引き上げた。

2. インテークと問題の所在

5/17 母親より「Aが荒れている。急に怒り出し、あつと言う間に台所の包丁を取り出してトイレを叩きこわした。どうしていいかわからない。」との電話が相談室に入る。10数年ぶりの母親からの電話であり、非常に気丈な母親からのSOSに、Thは緊急性を感じて家庭訪問をする。

A君は施設を退所して1ヶ月余りは家庭で穏やかな生活を過ごしていたが、5/11に施設に置いてあったすべての荷物を引きあげてから、その状態が一変した。穏やかな表情でビーズの作品を作って一人遊びをしていたかと思うと、一瞬にして表情が険しくなり怒り出す。絵本や雑誌、カレンダーを始めシーツや毛布も破る。自分が破った絵本を、母親に貼り合わせてもとの形に復元させる。これはA君が小学校3年の頃、学校でいろいろな物を破り、その度に先生に糊で張って復元させられていた、その時の外傷と繋がっている行動である。母親へ指示命令が増える。母親にノートに数字を延々書かせて、それが何冊にもなっている。一字でも間違えるとすぐ気付き、やり直させるなど強迫的で、母親を四六時中見張って支配し続けるのであった。

Thが家庭訪問した時は、トイレを壊した後であり、A君の表情はスッキリと穏やかな表情にはなっていた。A君「4.5.6....それがどうした。」(A君は自閉症の特有の数字へのこだわりがあり、

独語で数唱を繰り返す癖があったが、それをうるさいと施設の職員に叱責された時の言葉であろう。)、「げんこつ、ごん」(職員に脅され、また体罰を受けていたと考えられる。)、「トイレ、ウッシシ」(施設でのストレスからA君が破壊的な行動を繰り返し、職員が暴力をふるう。更にA君はその怒りをトイレの破壊に向け、仕返しして、いい気味だと言っているのであろう。)、「〇〇の雑誌あるか。」(生前父親が定期購読していた雑誌であり、A君に対して拒否的であった父親への怒りから、父親の死後A君はすべて破ってしまっていた。今またその雑誌を破りたいと言っている。)等々を断片的に語っている。

母親はA君の状態について、母親との生活に息がつまるような思いをしているのではないかと考えていた。ThはA君の衝動的な怒りの表出は、もう施設に帰らないですむ、安全な家庭という場所に帰ってきたからこそ出てきた、施設での虐待によるPTSDの症状であることを母親に伝え、次のような助言をした。取り敢えずは、危険な物は隠す。「破っちゃ駄目。」と禁止するのではなく、破っていい物を与えてあげよう。指示干渉は少なくする。A君の言語をそのまま繰り返し、「悔しかったね」とその感情を言語化してあげよう。衝動的な怒りは施設での嫌なことがA君の意思によらず記憶に侵入し、フラッシュバックをおこしている可能性がある。「ここは学園ではない。A君の家だよ。大丈夫だよ。」と意識を現実に戻してあげよう。

この時点では、ThはA君への相談室での治療をためらっていた。言語によるコミュニケーションも断片的である自閉症のA君にPTSDの治療ができるのであろうか、身長も170センチを超える青年期のA君の体力にThは対応できるのであろうかと迷っていた。それで暫く家庭訪問をしながら経過観察をしようと考えた。

3. 経過

①第1期：家庭訪問による経過観察から、入院を経て、作業所へ実習生として通所するようになるまで。ケースワークを中心として。

5/18 (家庭訪問#1) ThはA君と近くに散歩に出てみる。A君は、もの凄い速足で歩く。「ケンタッキー食べるか。」「ジュース飲むか。」「かき氷食べるか。」等々、目に触れる物を片っ端から食べたいと伝えてくる。母親から、施設に入所していた時の制限された生活環境での反動が今出ていると聞く。

5/20 (家庭訪問#2) 母親を支配する行動は相変わらずであるが、比較的落ち着いた状態であった。

5/28 (家庭訪問#3) 母親より相談室へ電話が入る。トイレの工事に業者が来て、古い壊れたトイレを外へ運び出す時に、A君の表情が一瞬にして険しい表情に変わり、トイレに向かって突進し、あっと言う間に奪い取り、団地の階段から道路へ叩きつけた。母親は、咄嗟のことにA君を押し止めることはできなかったし、またその時のA君の物凄い力を押さえることはもう母親の力ではとても不可能であった。通りがかりの人達が驚く中で、かろうじてA君を背後から抱き抱えるようにして「大丈夫、大丈夫」となだめるのが精一杯であった。

Thは仕事を終えての帰りに家庭訪問をする。母親は、いつA君が衝動的な怒りに襲われるか予測のつけようがない緊張に常にさらされ、かつ青年期のA君の力をもう押し止どめることはできないと自信を失っていた。Thは母親の体力の限界と、休養の必要性を考え、これ以上A君を

在宅でみることは無理だと判断した。

5/29 (家庭訪問#4・病院入院) Thは、自閉症の青年を入院させてPTSDの治療をしてくれる病院はないかと探した。その中で精神病院は自閉症は専門外であって、入院治療は望めないが、取り敢えず緊急入院させるしかないであろうとの助言を得た。そこでB精神病院に保護入院させることになった。入院にあたって、病院は自閉症については専門外であること、長くても1ヶ月半しか入院させられないと医師に告げられた。退院後にA君を在宅にすると、同じことが繰り返されると考えて、この時点でThは、自分の関わっているM市にあるNPO法人運営の障害者のための作業所に退院後のA君を繋ぐことができたらと考えていた。

6/22 (作業所訪問) 病院の外出許可をとり、A君と母親と一緒に作業所の見学と今後の相談に行く。A君は病院での強い薬に足元が覚束無く、眠そうな状態であった。作業所での話し合をしている間、ちょっと目を離れた際に、A君は男子トイレを中からロックして(家庭用水洗トイレにある、手を洗う箇所を持ち上げトイレに叩きつけ)、便器を木っ端みじんに壊してしまった。そしてA君は「トイレ、ウッシシ」と言う。Thは「A君が『トイレ、ウッシシ』と言う度にとっても悲しくなるよ。」と伝えながら、A君の怒りの奥には深い悲しみがあるのであろうと思いついた。母親は入院してもA君の状態が何も変わっていないと落胆する。

6/24 (病院から電話) 病院のケースワーカーより6月27日に退院させるとThに連絡が入る。Thは、A君が母親の付き添いのもとで作業所に体験的に通所をするその間、病院から外出という形で作業所に通所させ、夜だけでも母親に休養を取らせることはできないだろうか、退院を6月30日まで延ばして欲しいと頼む。

6/30 (母親から電話) 退院の報告がある。A君は7月から毎週月・水・金の3日間作業所に実習生として通うことになった。作業所のバスの送迎のある駅まで、自宅から電車を乗り継いで約1時間弱かかり、母親に送迎の負担はあるが、これ以上A君を在宅させることは無理だし、せめて5時間でも母親に家で休憩する時間をとらせることはできる。また母親は作業所の体験実習に付き添い、作業所の職員が、それぞれのメンバーのありようをそのままに受け入れて関わっているのを感じとっていた。母親は「自分達の地域に作りたかったのもこんな作業所だったのに、どうしてうまくいかなかったのだろう」と語っていた。

A君は、作業所でカレンダーを破いたり、TVのリモコンを手で真っ二つに折ってしまったり、破壊行為はあったが、喜んで通所していた。施設ではTVのリモコンは職員に管理されていて、自分の好きな番組が見られなかったか、何かリモコンをめぐるトラブルがあったのではないかと考えられる。作業所は、トイレの手洗いの部分の蓋を取り外したり、破壊されそうな物は片付けるなどの配慮をしてA君を受け入れた。

7/28 (母親面接) 母親より時間を取って欲しいと電話が入り、相談室で1時間面接する。

昨夜A君が急に荒れ狂って母親に飛びかかってきた。腕から体中、力一杯つねられてあざだらけになったという。少し落ち着いたところで頓服を飲ませて寝かせることができたが、A君の険しい表情がとても怖かったと恐怖を母親は語る。夏の暑いのに母親は長袖のブラウスを着ており、それでも首筋が全体に赤くアザになっているのが見える。

A君は、先週は風邪気味で作業所を休み、在宅の日が続いた。そして今週は家で37度5分の熱を出し、ひきつけを起こして倒れた。A君はこれまで脳波検査では異常は見られていない。精神科の医師には、ひきつけを起こすような熱ではないし、それ程強い薬は出してはいないから、心理的な問題で、精神発作の可能性があるとされた。昨日はA君はすっかり元気になり、母親の

顔色を伺いながらこれ見よがしにシーツやパジャマを破るなど、次々といたづらをし、母親は叱ることが多かった。そして夜にちょっとした母親の叱責にA君は“キレテ”しまったようである。

母親「こんな年齢になっても、やってはいけないことなど基本的なことがわかっていないと思うと、とても情けなくなる。破いちゃ駄目、壊しちゃ駄目と何度も言って聞かせているのに…。これまでできていたことがなにもできなくなってしまって..」Th「A君は今、施設でひどい目にあって精神的に混乱している状態にある。やってはいけないことが分かっていないのではない。これまで苛酷な条件に耐えてきた怒りが、衝動的に吹き出しやすくなっているのだと思う。怖い事件に遭遇した後は、A君に限らず、赤ちゃん返りするの是一般的な現象だと思う。自他に危険がある場合を除いて、指示や禁止を少なくしてみませんか。絵本やシーツ、洋服を破って苛々を解消しようとしているのなら、ある程度やらせてあげるしかないのでは。」母親「そうかと言って、止めないで知らんふりをしているとそれも気に食わない。『もうやるんならやれば。』と内心は怒っていると、Aは更にその私の感情に反応して、目がすわって今にも飛びかかってきそうになる。いつ飛びかかってくるかと思うととても怖い。」Thも母親と一緒に、「難しいねえ」と頭を抱えてしまった。

母親は「どうしてこんなことも分からなくなっちゃったのと悲しくなる。怒らないで見ていてやるのは、とてもストレスが溜まりますよね。」「新聞の事件で見る子殺しのように、薬を一服もって殺したくなります。」「養護学校の卒業を控えて、作業所を作る運動を始めた時は、またこれからこの子と最初から始めようという気持ちがあったのに、今はとてもそんな気持ちになれない。」と嘆く。Thは、今のA君の非常事態に、こんなことがいつまで続くのかと思うと絶望的な思いに捕らわれるのは自然の感情だと思うと受け止めながら、「それよりもお母さん、この前からずっと感じているのだけれども、何故お母さんはA君を虐待した施設の側を責めないのだろうか。ひょっとしたらお母さんは施設に対する怒りよりも、施設に預けた自分のことをもっと責めているのではないか。そのことが私にはとても気になっていました。」と伝えた。母親は「なんであんな施設に預けたのだろう。」とわっと泣き出した。新設の施設に入所させるのに、こんなひどいことが起きるとは誰にも予測できなかったであろうし、またそうでなくとも施設入所は難しく、施設を選ぶなんてことができない現状の中で、他にどんな方法があったであろう。Thの「お母さんはこれまでずっとその時その時を精一杯にやっていたし、他に方法はなかったと思います。」との言に、母親は「施設に預けたことで、夫を亡くした後に精神的に私自身が立ち直るまでに必要な時間を得ることができました。それに2年間はAも施設で順調に生活できていた時期もありました。」と振り返ることができた。

あの気丈な母親が泣けたことに、安堵するとともに、最後に母親がぼつんと言った「生きて行くことは大変ですね。」に、Thは今の母親の置かれている状況の大変さと、その重い心中に伝える言葉もなかった。またA君への今後の対応については、Thはこれといった確かな見通しを持つことができないままであった。

②第2期：危機的な状況に夜の家庭訪問で対応する。A君は、施設での嫌な記憶の侵入に、衝動的な怒りを繰り返す。9/17（家庭訪問5）から9/22（家庭訪問10）まで毎晩Thは家庭訪問をし、A君の寝付く10時半か11時までの2時間余りを一緒に過ごす。

9/17（家庭訪問#5） 母親より電話が入る。A君は作業所には順調に通っているが、家では先週からまた荒れ始め、今日は電話を破壊してしまった。ここ数日電話にこだわり、作業所の電話も

壊した。施設で何か電話にまつわる嫌な体験があったのではないかと考えられるが、これもA君の説明がある訳ではないので詳しいことはわからない。ここにきて夜寝付くのも遅く、早朝の3時とか4時頃には起きだす。そして母親に数字を書かせたり、突然窓ガラスを割ったりと、またもやA君がいつ何をするかわからない緊張に母親はさらされていた。A君は薬で足元がふらふらになりながらも、必死に冷蔵庫を物色し、パンやジュースを飲んでやっと眠る。

9/19 (家庭訪問7) 冷蔵庫を必死に物色し次々と飲食するのが入眠儀式になっている。布団に横になり、これで眠るかなとこちらが安心した時に、いきなり立ち上がり、一瞬の内に食器棚のお茶碗を床に叩きつけ壊してしまう。A君は布団に横になっても足の指先まで、全身に力が入り緊張している状態である。

9/21 (作業所訪問) 母親よりA君が、大声で叫び続けていると電話が入る。電話の向こうにA君の奇声が響いている。Thは他の相談をキャンセルして、A君と母親と一緒に作業所を訪問する。A君は電車の中でも何度も大声で叫ぶ。作業所に着くとA君はさっきまでの状態が嘘のように落ち着く。A君の作業所の日数を増やしてもらえないかと頼む。

この2日間、A君が「茨学園、行くか。」と聞き、母親が「もう学園には行かない。」と答えても、同じ問いを何度も繰り返していた。また「どうした」の独語が増えていたという。

9/22 (病院へ連絡) Thは母親の体力的な限界を感じて病院に連絡し、作業所へ通う日数が増えるまで、週末の土・日曜だけでも入院させることはできないかと打診する。来週主治医に相談するように言われる。

③第3期：相談室でPTSDの治療を始める。

主治医に会うまでの週末をどう乗り切るかが切実な問題であった。母親の体力的な限界を感じて、日曜祭日の相談室を開け、プレイルームでThがA君を預かることにする。最初からThはPTSDの治療を考えていた訳ではない。たまたま預かった時のプレイルームでのA君の行動に治療のてがかりを感じ、手探りでやって見ようと思えるようになったのである。

9/23 (プレイセラピー#1 am10:30～pm5:00) 事前に相談室の水洗トイレの手洗いのシンクの部分の蓋は取り外し、破壊に繋がるような品物は取り除いておく。破いてもいいような古い絵本を沢山用意した。おやつや、昼食も準備しておく。母親には面接室で待っていてもらうことにした。

A君が「どうした」を繰り返すのに、「悔しかったね。悲しかったね。」と応答するうちに、A君が紙に「どうした」と書いた。そのことで、Thはこれは治療が可能かもしれないと感じた。Thも紙に「どうした」と書き、繰り返し破いて見せた。何度か破くように言っても駄目だったが、その紙を手渡すと、A君もようやく破くようになる。何枚も何枚も破らせ続けた。

玩具に噛み付いて壊そうとしたり、絵本を破いたりしながらも、全体的にはA君はソファに横たわっていることが多い。その姿にA君は本当はとても疲れているのではないかと感じた。母親やThがA君に振り回され、疲れている時は、A君の方だってそれ以上に疲れているのかもしれないと改めて気づいた。一方、待っている間、面接室のソファに横たわり泥のように眠る母親の姿を目にした時、Thは翌日の日曜日にもA君を相談室に預かろうと思った。

9/24 (プレイセラピー#2 am10:30～pm5:00) A君は相談室には嬉々とした表情でやって来る。プレイルームに入るなり、Thの気をひくように笑いながら、ジーンズのズボンに小さなほころび目を作り、指で更にその穴を大きく破ろうとする。すぐに他のズボンに履き替えさせると破ら

なくなる。古い絵本の山の中から、ポンキッキの絵本を取り出し2冊破る。A君の好きなポンキッキの番組は、施設ではTVのリモコンは職員が管理しており、見るができなかったようである。またA君の施設入所中にその番組が変わってしまったことも嫌だったのではないかと考えられる。

A君は、時折「そっちはえらい」と繰り返し呟いていたが、そのうち「あいうえお」の絵本の中から、「え」の文字を破り取る。そこでThは「ひょっとしたら学園で他の友達と比べられて、『そっちはえらい』、A君には『そっちはえらくない』と言われていたのかな。嫌だったね。悔しかったね。」と応じた。Thが紙に「え」「えらくない」「えらい」と大きく書くと、A君は次々に破っていった。

プレイルームのソファに横たわり、「どうした」や「そっちはえらい」の独語を呟いていたと思うと、むっくり起き上がる。「あいうえお絵本」や、Thの手渡す「どうした」と「え」の紙を破いてはまた横になる。横たわっている時に過去の嫌なことを思い出し、独語を呟き、起き上がってはその怒りを破る行為に表現しているようであった。また自分で紙に「あなし」(A君の「あいうえお...」の独語に職員に「それがどうした。」「あ」はなし」と叱責されたのではないかと「1234567890」(A君の数唱の癖を叱責されたのではないかと)を書いて黄色のクレヨンで力を込めて一気に塗りつぶした。そして「伊藤先生」とかすかに呟く。後で母親の説明でA君に暴力をふるった施設の職員の名前とわかる。日常の他の場面でも聞き取れるか取れないかの小声の部分にA君の一番訴えたいことは表現される傾向が見られている。

A君は前日より笑顔は増えて来ているが、ソファに横たわっていても、足のつま先まで力が入り、緊張が見られる。時々プレイルームのマジックミラーに映る自分の顔をジッと見つめている。昼食もおやつも食べては、すぐトイレに走って全部吐いてしまう。全身の緊張に、胃も飲食物を受けつけなくなっているのではないかと考えられた。

母親からの報告では、前日は相談室から帰宅したA君は、一人で文字を書いたり、テープの音楽を聞いたり穏やかだった。その側で母親がミシンを出して繕い物をして平気だった。こんな時間は久しぶりだったという。

9/25 (家庭訪問#11) 前日相談室から帰宅して、A君が母親に「伊藤先生」の名を告げた。これまで次々に職場を去って行ったA君の好きだった職員の名前はよく口にしていたが、A君に暴力をふるった先生の名前は初めて出た。この2日間は夜10時半から朝の6時までA君は熟睡した。相談室での時間がA君の緊張を少しは和らげることができたようだ。

しかしこの日は夕方に、突然ブレーカーのカバーを壊してしまった。以前通っていた作業所でA君がラジカセを聞くのに夢中で、帰りの集会になかなか参加しないのに、職員にブレーカーの電源を切られたことがある。怒りがその時の記憶に繋がったようである。就寝までに、(仲の良かった養護学校の友達が卒業後入所した施設の名前をあげ)「いずみ君、アスカホーム、さようなら。」、(施設を辞めていったA君が好きだった先生達の名前をあげ)「～先生、引っ越した。」と繰り返していた。不快な記憶や怒りの感情の一方で、好きだった人や楽しかったこととの別れがA君の中に想起されているのであろう。

9/26 (プレイセラピー#3) A君は絵本の中のトイレや電話の部分を破り取り、そのうち絵本全部を破る。手で破れない時は、歯で噛み切る。「12月がどうした。」(A君の1月お正月2月節分...と年中行事を言って楽しむ癖があり、それを職員にしつこいと叱責されたのであろう。)、 「33がどうした」(数唱を咎められ)、 「げんこつ、ごん」等々の独語とともに絵本を次々と破る。Thが

「A君、つらい目にあったね。茨学園嫌だったね。もう我慢できなかったよね。A君はとてもよく頑張ったよ。」と語りかけながら、「茨学園、おしまい。」と書いた紙を破らせる。A君も復唱する。「コーヒーゼリー」(A君は団地の階下の家でコーヒーゼリーをもらったことがある。嬉しかった記憶である。)と体を上下に弾ませるようにして嬉々として叫ぶ。

突然「10月はおしまい」と言って、目に手をあてて泣いているかのような声を出す。そして目を閉じてしかめ面になり、目を開けたかと思うと暫くじっと遠くを見つめている。10月はA君にとって悲しい思い出があることを母親の説明で知る。A君と母親は昔から10月の体育の日には障害者センターのプールに出掛けていたが、施設に入所した年は、それももういいかなと母親は行かなかった。しかしその日A君は施設の玄関でずっと母親を待ち続けていたと後で職員の話に聞かされた。10月は、母親を期待して待ち続け、裏切られ深く傷ついたA君の記憶と繋がる。また暦の上で10月の体育の日が変更になったことも、ある決まったパターンに拘るA君にとっては気に食わないことであった。以来10月のカレンダーを見るとA君は破いてしまう。

プレイルームでのA君はハミングして楽しそうな時、しかめつらや悲しそうな時と、その表情はくるくる変わる。そして絵本や紙を破りながら何か小声で早口に呟いた。それはThにはよく聞き取れなかった。その後A君は「ウンチ行く」とトイレに走った。プレイの中で怒りを出してきた時、途中で大便に行くことが他のクライアントでもよく見られるので、ある程度A君の怒りが表出されたのではないかと考えられる。

A君は帰宅して母親に「阿部先生」(Thが聞き取れなかった言葉であろう)のことを告げた。「どうした」とA君を叱責していたのは阿部先生なのだ初めて母親は知った。最初の頃はとても感じがよく、A君にも良くしてくれていたあの先生も変わってしまったんだと母親は驚いた。10/1(プレイセラピー#4) 2時間プレイルームのソファで頭から毛布を被って眠ってしまう。緊張が取れてこれまでの疲れがで始めたのではないか。

10/2(家庭訪問#12) 夕方Thの自宅のチャイムがなり、出て見ると、雨の中をA君を連れた母親が悄然として佇んでいる。A君の家とThの自宅は徒歩30分の距離にある。作業所から帰り、夕食も済ませて母子で散歩に出掛けようとしていた時、A君が団地の階下の家に入り、トイレを壊してしまったという。そこのご夫婦はA君に幼い時から好意的であったという。それだけに母親は強いショックを受けている。すぐ折り返し家庭訪問をするからと帰す。その日はさすがのA君も、肩を落として深く沈み込む母親の姿に、心配そうに顔のぞき込み、母親から目を離せないでいる状態であった。

来週から作業所が、月曜日から金曜日までA君を引き受けてくれることになった矢先の事件であった。作業所ではA君は順調に過ごしており、スタッフにとって家庭でのA君の状態が信じられないと言う。

10/3(家庭訪問#13) 作業所のスタッフ達が母親を気遣い、A君を作業所に1泊させてみようという申し出がある。その電話にそれまで沈みがちだった母親に一瞬にして笑顔が戻った。「A、良かったね。あした作業所にお泊まりだよ。」と嬉々として宿泊の荷造りを始めた。子どものように素直に喜ぶ母親の姿が印象的であった。

10/4(病院訪問) Thは母親と一緒に病院を訪問し、暫くでいいから病院から作業所に通えるようにナイトホスピタルを試みてもらえないかと交渉する。主治医は「もう家庭でみるのは無理なのだから、施設に入れなさい。知的障害は治らないのだから。」と言われる。主治医は自閉症もPTSDについても無知であった。これまで母親が何を訴えても主治医には通じなくて、悲しい

思いに突き落とされてしまうと言っていたのがよく理解できた。ケースワーカーと話し合い、この次にA君が荒れることがあったら救急車を呼び保護入院させなさいとの助言を得る。薬が増える。

(作業所へ宿泊) 夜は、Thはスタッフと一緒に作業所にA君と泊まる。作業所では笑顔の多いA君である。Th自身も、作業所の雰囲気の中でほっとする。家での母子との緊張状態とは別世界の感があった。家ではA君が立ち上がると何か危険なことをするのではないかと緊張が走る。その緊張がA君に伝わる悪循環に巻き込まれていた。スタッフと外食を楽しみ、スムーズに行動しているA君に、これがA君の本来のありようなのだろうと思えた。A君は、寝る時、布団に腹ばいになり新聞紙の上に「おかあさん だっこおんぶするか しない じぶんであるく」と文字を書いた。A君と母親との昔の会話であろう。A君の「お母さん、だっこかおんぶしてくれる。」に母親が「もう大きいから、だっこもおんぶもしない。自分で歩かなくちゃね。」と答えていたのであろう。今そのことを書いた意味は何であろうか。20歳になって母親はA君を自立させようと、施設への入所を決意した。しかし施設の虐待的な環境で、深く傷ついたA君は今では退行し母親に甘えたい。母親の「どうして何もできなくなってしまったの、しっかりしてよ。」という思いは伝わっていても、今のA君にはどうしようもないのであろう。A君の走り書きには自立と依存の葛藤が表現されている。この夜A君は11時に眠り、朝7時まで熟睡した。

10/5 (家庭訪問#14) 母親が「何かふっ切れたように思う。施設を退所してから、もう私でなければこの子は駄目なんだと思っていたが、そうでなくても大丈夫なんだ、もう自立させようと思えた。」と語った。以前の作業所では調子を崩し、施設では傷つき、家にあっても荒れ狂うA君に、母親はもう逃げ場がないと追い詰められていたのであろう。作業所に一泊して、スムーズに過ごせたこと、作業所のスタッフの援助が孤立無援の思いにあった母親を支えた。

10/6 (家庭訪問#15) 朝、窓ガラスを蹴って割る。入眠時と目覚めの時に、過去の記憶に侵入され怒りが出やすい。

10/7 (プレイセラピー#5 am11:00～pm2:00) 強い薬に変わったためか、ソファで眠ることが多い。伊藤と阿倍の名前を紙に書き、破らせる。伊藤の名前をThがすぐに思い出せず、A君に確かめると、A君は自分でその名前を書く。「伊藤はえらくない」「伊藤のバカヤロー」「伊藤なんかやっつけちゃえ」と書いた紙を破らせる。A君の破るペースに合わせて、Thは絶叫する。A君は笑いながら「コーヒーゼリー」と喜々として叫ぶ。「コーヒーゼリー」はA君の嬉しい時に出る言葉でもあり、Thが伊藤や阿倍のことを怒っているのだということがA君に通じた手応えがあった。

10/7 (家庭訪問#16) これまで洋服ダンスの鏡と洗面所の鏡に自分の顔を映して5～10分間じっと見入っている行為が一晩の内に数度繰り返されていたのが、消えた。鏡の中の自分を見つめるのは、心的外傷によって内的な統合失われ、A君自身がそのことに強い不安を抱いていて、鏡の中に自己を確認しないではいられない状態にあったのではないかと推察される。

10/11 (家庭訪問#18) 笑顔とすっきりした表情のA君。寝転んで数字や文字を書いて遊んでいる。時折母親に数字を書くように指示を出す、固執していない。ようやく以前のように一人遊びできる状態に戻った。またA君は自分で早々と布団に寝転び、リラックスし、笑い声をたてている。飲食の入眠儀式を済ませ、鼻歌を歌いながらスムーズに眠りに就く。

10/12 (家庭訪問#19) A君は穏やかな状態である。おやつを食べるが、これまでのように必死に食べ物を探すのがなくなり、あまり食べ物にこだわらなくなっている。母親は「いつでも食べ

られるという安心感からでしょうか。」と笑って語る。

10/13 (家庭訪問#20) A君、以前中断していたジグゾーパズル「ミレーの晩鐘」に取り組んでいる。破壊的な行動から、作り上げる行動への変化が見られる。時折鏡をのぞきこむことはあっても、その表情も穏やかになったと母親は言う。母親に「トイレ鍵かけるか。」(自分がトイレを壊したくなっているから、鍵をかけて欲しい)と伝える。そうやってA君は破壊への衝動をコントロールし始めた。

10/14 (プレイセラピー#6) A君が「ヤメロ」(施設でA君がトイレを破壊しようとした時、職員が止めようと叫び、A君に暴力を振った時の状況に繋がっている言葉ではないだろうか。)と言ったので、Thが紙に書くと、A君は笑顔ですぐそれを破る。Thの怒りの絶叫に合わせ紙破りを続ける。Thの「A君、辛かったね。電話でお母さんに助けてと伝えたかったんだよね。もうお母さんと一緒、大丈夫だからね。」に、A君は「お母さん、助けて」の部分で復唱する。

A君の見ていた歌の絵本の中の曲をThが歌い、A君がページをめくる。その中の「雨雨降れ降れ母さんが蛇の目でお迎え嬉しいな…」に、A君の表情が暗くなり、ドーンと全身が落ち込んだ雰囲気になってしまった。目を細めて暫く動きが止まった状態が続く。Thの「苦しいの。」に、A君「苦しい。」と復唱する。落ち込みというより、心ここにあらずといった解離に近い状態に陥ったのではないかと思われた。その後トイレで吐く。ThはA君が施設で母親を待っていてその期待を裏切られた時の深い傷つきに触れ、内面に侵入し過ぎてしまったと感じる。このままではプレイを終えることはできないと、A君の陥った状況を変えるために、紙破りをさせた後、シャワーに誘う。シャワーを浴びて、ソファで一休みしたA君に笑顔が戻ってきたところで終了する。

10/14 (家庭訪問#21) その日の相談室でのA君の様子が気になって夜に家庭訪問をする。雑誌を破る。体に力が入り、緊張している。鏡や窓ガラスに自分の顔を映して見入る時間が増える。なかなか寝付けないで布団から何度も立ち上がり食べ物と飲み物を要求する。やはりプレイセラピーでThはA君の内面に深く侵入する過ちをおかしてしまったと感じる。

④第4期：治療の終わりへ。外傷による喪失の悲しみと統合へ。

10/15 (プレイセラピー#7) A君が「茨学園おしまい」とぼつんと言う。「茨学園おしまい。もう学園には行かないよ。」とThは応じ、「茨学園おしまい」「おわり」「茨学園バカヤロー」と書いた紙を破らせる。Thの絶叫に合わせてA君が笑顔で破る。

10/15 (家庭訪問#22) 少しずつ距離を置こうと考えて、訪問時間を30分に短縮する。A君は朝4時半に起き、一人で「晩鐘」のジグゾーパズルを完成させたと母親から報告がある。

10/16 (家庭訪問#23) A君は、夕方に作業所から帰宅し、風呂場に籠もり暫く落ち込んでいた。そういう時は母親が声を掛けてもA君には全く届かない感じであるという。母親と散歩に出掛けたりしているうちに元気になる。

A君は「岡田さん引っ越した、もう会えない。」(団地でA君に優しくった人)「清里終わり」(小学校時代毎年参加していた相談室のキャンプ)「中1大沢先生と菊地先生」(A君の良き理解者だった先生)「小1桃屋」「小2キューピーマヨネーズ」(小学校の楽しかった社会科見学)等々の過去の好きだった人、楽しかった思い出を連ねている。小学校4年の時に不登校で学校に行かなかったことも今になって悔しがらる。これまでA君は施設での辛い体験の記憶に圧倒されていたのが、それ以前の楽しい思い出を語り、そしてその一つ一つを過去のこととして自分の中で確認

しているかのようである。

10/17 (母親からの電話での報告) 以前の軽い薬に戻したのに、夜もよく眠るようになった。作業所の朝の散歩に土手の上で眠ってしまうなど薬が効き過ぎている感じがする。作業所から帰宅して風呂場に籠もり落ち込むが、母親との散歩で、表情が明るくなっていく。

10/22 (母子と一緒に日帰りで奥日光のハイキングへ) 母親は以前はよくA君と二人で旅行に出掛けていたが、ここ暫くA君との遠出には自信を失っていた。A君の状態が落ち着いてきたこともあり、治療の終わりの儀式として、Thも付き添ってハイキングに出掛けてみることにした。A君は戦場ヶ原の木道を鼻歌を歌いながら先へ先へと歩いて行く。状態の悪い時の頻尿がいつの間にか消えているのに気が付く。

11/5 (プレイセラピー#8) 本棚から電車の本を取り出し、破ろうとする。「それはお友達が好きな本だから破らないでね。お友達が悲しむよ。」のThの言葉にA君はすんなりと本を棚に戻す。

最近のA君は、施設での嫌だったことについてはもう話さなくなったし、そのことへの怒りも見られなくなった。そして「ポッキー買うか。」等の今の自分の要求が母親に伝わらない時、その苛立ちを「えーんえーん」と甘ったれた叫び声で訴えるのに変わったと母親からの報告がある。A君の背骨に沿ってついていた痣も施設退所後、7ヶ月にしてようやく薄く消えてきた。

4. 考察

(1) セラピーのプロセスについて：A君の衝動的な怒りと破壊的行動、体の緊張、睡眠障害等は、虐待的な施設環境にあって引き起こされた典型的なPTSD(心的外傷後ストレス障害)の症状である。A君の衝動的な怒りと破壊的な行動は暴行を受けた過去の場面で、A君の意思によらず侵入的に想起された時に引き起こされたものである。

当初ThはA君のPTSDの治療をすることをためらった。それはA君が自閉症であり、言語表現が断片的であること、心身ともに深く傷つけられたその怒りを治療場面で直接的な暴力としてではなく象徴的にプレイアウトできるであろうかと疑問を感じていた。もし直接的な暴力として表現された場合は、Thは26歳の青年の力に対応するだけの体力的な自信はない。あるいはセラピーで怒りが表現できたとして、セラピーの場面と、生活場面との切り替えができるのであろうかと、Thは治療への見通しを持てなかった。

しかし窮余の策でA君を相談室のプレイルームで預かるしかなかった状況の中で、ThはA君の行動にPTSDの治療への可能性を感じ取ることができた。プレイの中で、A君の断片的な言葉を拾い、文字にして紙を破らせ、A君に代わってThが怒りを絶叫することで、A君の怒りや緊張は軽減されていった。またその過程でA君は、身体的暴力をふるった職員の名前と言葉による暴力をふるった職員の名前をようやく口にすることができた。ThのA君の痛みへの共感と、A君の怒りは当然であり、“あなたが悪い訳ではない。”と伝えようとしたことは、A君に通じたようである。A君は「茨学園、おしまい」と、施設での外傷的な体験を過去のものとすることができ、またかつて好きだった友達の名前やその人との別れを語り、それ以前の過去との連続的な時間を取り戻していった。ジグゾーパズルを作り上げたことに、虐待によって失われた内的統合性の回復が象徴されているのではないだろうか。そして更にA君は衝動的な怒りの底にある、深く傷ついた悲しみに沈潜していった。半年余りの治療を経て、A君は、衝動的な破壊行動を自己統御する力を取り戻してきている。

自閉症のA君の治療のプロセスは、心的外傷からの回復の3段階「①安全の確立②想起と服喪追悼③再結合」(Herman, 1996)を概ね辿っている。自閉症の限られたコミュニケーションであったとしても、本人の断片的な表現を翻訳するかのような作業の中で、PTSDの治療は可能であった。

(2) A君の身体的な緊張状態に、リラクゼーション、脱感作等の他の療法も有効なのではないかと感じながら、Thがその方法に習熟していなかったことで使えなかったことが残念である。

(3) 投薬との関連：食べては吐く行為は、薬の副作用によるものかと考えていたが、日によって吐いたり、吐かなかつたりが見られ、精神的な要素も大きく作用していたと考えられる。また睡眠障害には、強い薬でさえなかなか効かなかったが、プレイで怒りを表出した後は、よく睡眠できるなど、薬だけではA君の症状の回復には繋がって行かなかった。勿論危機的な状態は薬物の使用なくしては乗り切ることはできなかったが、薬物の援助のもとでの心理療法の効果と言えよう。

(4) 自閉症児・者の心的外傷の特質について：A君は施設の職員に受けた暴行に心身両面にわたって深く傷ついた。そしてその怒りはそれ以前の小学校の先生や父親との関係等々の過去の外傷にまつわる怒りを呼び起こしてしていった。これは自閉症特有のパーソナリティーのありようと考えられる。自閉症児は周囲の環境に非常に過敏に反応するが、その内的な苦痛を他者に言語でコミュニケーションすることが難しい。それだけに日常生活の中で数々の傷を心に負い鬱積し、それが何かのきっかけで次々に惹起されていく傾向が見られる。自分の思いが周囲に理解されないことはどんなに辛いことであろう。今回は施設での暴行による外傷のみに焦点をあてて治療をした。その結果、それ以前の過去の外傷にまつわる独語も消えて行った。今後何か大きな心的外傷を受けるようなことがあれば、その時はまたそれらは繰り返し表現されることであろう。A君の怒りが何故トイレの破壊に向かうのかは定かではない。かつて不登校で引き籠もった時もトイレを破壊している。

(5) A君は、作業所では比較的順調な状態にありながら、家庭では荒れ狂っていた。この落差は、一つには家庭での母子だけの状態と、作業所のスタッフ達の中にいるのでは、その人数から何か起きた時の対応への安心感が全く違うことが上げられる。もう一つは、一番安心して依存できる母親だからこそ、A君の怒りは向けられたのである。団地の階下の家のトイレを壊したのも、A君を常日頃受け入れてくれている人の家だったからこそその行動であったと言えよう。

(6) 日曜祭日に長時間相談室に預かったり、夜の家庭訪問を続けるなど、A君や母親への対応は、心理治療やケースワークの枠を大きく外れており、Thが無我夢中で力で乗り切った感が強い。そこまでやる必要性はあったのか、Thが抱え込み過ぎているのではないかと、もっと保護入院を使い、母親の負担を軽減することはできたのではないかと等々が考えられる。入院という保護された環境の中で治療ができればそれに越したことはなかったと思う。ただ現状では他に方法がなかった。今後ともいかに地域の中で医療や福祉との連携を耕して行くかの課題が残されている。

(7) A君の治療と回復は、窮地にある母子を快く受け入れてくれた作業所の支援無くしてはあり得なかった。スタッフがメンバーとともにあろうとする、この作業所の基本的な姿勢とゆったりとした雰囲気はA君にとって心地よい居場所になった。作業の内容も、資源回収の空き缶つぶしや、牛乳パックからのハガキ作りの工程での紙破りとA君の破壊への欲求を充たすものであった。またトイレや、リモコン、電話の破壊等には、その都度環境的に工夫し、禁止や叱責が繰り返されることのないような配慮があった。危機的な状況で、A君を作業所に泊めようというスタッフ

からの申し出は、母親に心身ともに大きな支援となった。親達が重度の障害をもったわが子のために作った作業所であったからこそ、民間の作業所の柔軟な対応に助けられた。

おわりに

A君は、職員が次々と代わったり、施設での処遇に問題があったから、そのストレスから破壊的な行動に至ったので、その逆にA君が破壊的な行動を取ったから職員が怒ったり、殴らざるをえなかったと考えるなら、それは非常に危険である。障害児者の行動障害は、周囲の無理解から引き起こされるものである。暴力では問題は何も解決できないこと、そこに施設職員の専門性が問われる。更にはもっとそれ以前に虐待的な環境を作らないような施設の体制が問われる。施設の職員の労働条件が園生の生活の質に大きく影響することは言うまでもない。昨今の民間の福祉施設の不正の問題等のニュースに筆者は、A君の問題は氷山の一角であって、まれなケースとは言えないのではないかと感じている。現場では原因が障害ゆえにと転嫁され、一方親は成人した障害者を自立させることは当然のことなのに、大変な子どもを預かってもらっているという負い目から、問題が表面化されないでいることが考えられる。施設が密室にならないように、地域社会に開かれ、障害児者が地域で普通の生活ができるような福祉のありようが求められる。筆者は、今回のA君のことから、地域社会の中に、個々人のニーズに応じた多様な支援とネットがあれば、重度の障害者の地域での生活は十分可能であることを感じている。

参考文献

- Gil, E.: *The Healing Power of Play: Working with Abused Children*. New York, Guildford, 1991. (西澤哲訳：虐待を受けた子どものプレイセラピー。誠信書房, 1997.)
- Herman, J. L.: *Trauma and Recovery*. Basic Books, 1992. (中井久夫訳：心的外傷と回復。みすず書房, 1996.)
- 小西聖子：インパクト オブ ト라우マ。朝日新聞社, 1999.
- 松下正明総編集：臨床精神医学講座，外傷後ストレス障害。中山書店, 2000.
- 中根晃・市川宏伸・内山登夫編集：自閉症治療スペクトラム。金剛出版, 1997.
- 西澤哲：子どもの虐待。誠心書房, 1995.
- 岡野憲一郎：外傷性精神障害。岩崎学術出版, 1995.
- 杉山登志郎：自閉症児への精神療法的接近。精神療法, 21(4)；325-332, 1995.
- 山崎晃資・栗田広編：自閉症の研究と展望。東京大学出版会, 1987.